「お粥かくしの　長暖簾」　グループ空清

小野恵美子氏の「ききがき　京の女たち」に収録された「室町の女」がもとになっている。室町の染物問屋の奥さんだった人に、女性の立場から戦前の室町の姿を語ってもらい、一九七五年に編んだものである。今回その文章はそのままに、構成をしなおして台本とし、一人語りという形で上演された。聞き書きから更に四十年が過ぎ、余りにも生活が変わってしまった今日、立ち止まって、遠い遠い昔ではないけれど昔になってしまった生活を振り返って語ってみせましょうというのだ。その試みには大いに共感を覚えるし、今後も頑張っていただきたいと思う。だが内容から言って、ドラマ性がある訳でもなく淡々と当時の様子を語るだけの作品を一時間も一人で上演するのは大変なことだ。にもかかわらず会場一杯の観客を集め、堂々と演じられたことは、賞賛に値する。

本を読むのが朗読、無本で語るのを語りだという人もあるが、世の中には様々な形式があって、そう簡単には括れない。私は今回のような語りの場合、語りの再現性が重要だと考える。恰も室町の奥さんだった人が目の前で語っているのを聴いているような気にさせられるか、先を聞きたいとう気にさせられるかである。語り手が消え登場人物が立ち上がってくる、正に聞き書きの場に居るかのような語りである。一番後ろの席で観たからかも知れないが、その点では物足りなかったし、無本の朗読といった感が拭えなかった。ただ、別の会場でやれば随分印象が違うかも知れないなとも思う。

ところで、幕開きに「パリの空の下」が流れ「パダム・パダム」で終わったが、何か意味があったのだろうか。一九五〇年頃のシャンソンの歌詞とこの話しに余り関係はなさそうだし、他は説明的な音響だっただけに、少し唐突な感じがした。何をやりたかったのだろう。

木守功

Kyoto 演劇フェスティバル講評

グループ空清「お粥かくしの長暖簾」

台本を手にしながら行われる演劇は一般的に朗読劇と言われる。では今回、グループ空清によって上演された「お粥かくしの長暖簾」は、朗読劇と呼び得るだろうか。パンフレットから得られる情報では、今作品が朗読作品だとは誰も思わない。しかし、実際の上演が始まると、舞台上の女優は、度々下を向いている事にだれもが気付く。会場は和室、多くのお客さんで埋め尽くされていたため、膝元に置かれた台本を認識するまでに少し時間がかかった。しかし、確かに舞台上の女性は、度々視線を台本に投げかけている。これは朗読劇なのだろうか。私は終始その事ばかりを考え続けてしまい、室町に住む女性の語りにほとんど集中する事が出来なかった。朗読劇かどうかという事を考え続けた結果、私は作品に集中できない最大の要因は、彼女の視線であると分かった。

今作品が始まる直前、グループ空清関係者と思われる女性が、開演前の挨拶を行った。その挨拶によると、今作品では「語りによって物語を描く」と言っていたように記憶している。作品が始まると、女性が暖簾の奥から登場し、観客に背を向けて座る、かと思うと、誰かに呼び止められたかのように観客の方へ振り向き、「あんた」と言う。つまり、女性には語る対象が明確に存在していたのだ。この振り向き方と台詞によって作られた最初の枠組みは、当の彼女の視線が下がる度に壊され続けた。観劇する際に、物語内容以外の要素によって観客の集中が切れてしまうのは、とてももったいない。作品の後半、祇園祭について語りだす場面があるが、そこだけ台本を手放して、舞台前面に立って語っていた。その場面だけ「お粥かくしの長暖簾」が存在したと私は思う。パンフレットには「出演」では無く「表現者」と記載されていたが、表現者として台本を盗み見る行為は避けなければならないだろう。もしこの芝居が最初から朗読劇である事を観客に伝えていたのであれば、少なくとも私の反応はもう少し違ったはずである。観客とどういった関係を切り結ぶのか、表現者なり演出家がもっと真剣に冷静にそのことに取り組まなければ、物語内容は台無しになる。何を伝えたいのかよりも以前に、何が伝わってしまうのかである。皮肉な言い方をすれば、観客は舞台上において、いとも簡単に「長暖簾」のその奥を覗くのである。

伊藤　拓（演出家）